

## チャールズ・ディケンズの人種差別主義——1853年から1863年までの変化

山本まゆみ

### はじめに

ジャネット・ブラウン (Janet Brown) は *Darwin's "Origin of Species"* (2006) で「ヴィクトリア朝は、かつてないほど多くの人々が科学に引き寄せられた時代でもあった」(88-89) と述べている。ブラウンによると、この時代に人々は、地方の科学協会や、巡回図書館、講演会、電気や化学や磁気に関する公開実験などによって刺激され、手工業が生み出す製品があまねく人々の手に渡るようになり、道路、鉄道、橋、船舶、運河といった、発展が見られた(89)。さらに彼女はロバート・チェンバーズ (Robert Chambers) の *Vestiges of the Natural History of Creation* (1844) やアルフレッド・テニソン (Alfred Tennyson) の *In Memoriam* (1850) などの書物は、すでに読者に、人間存在の起源、意味、目的といった大きな問題に疑問を投げかけるように仕向けていた」(89)と説明している。ヴィクトリア朝は大きな変化、進歩がさまざまな分野で見られた時代であった。ディケンズはそうした錯綜した状況の中で、時には似非学問に対処し、またある時は肯定できない思想に戦いを挑んだ。

このような時代状況の中で、チャールズ・ディケンズが “The Noble Savage” を書いた1853年は高貴な野蛮人を賛美する人々と、否定する人々の対立が明らかになった年であり、その象徴的な出来事が前年に『アンクル・トム的小屋』(*Uncle Tom's Cabin*)を著したストウ夫人(Harriet Beecher Stowe)の春のイギリス訪問であった。ストウ夫人の黒人賛美に対し、ディケンズの態度は否定的で、一般の人々の高貴な野蛮人への感傷的賞賛を攻撃していた。

それから十年が経過した1863年にディケンズは “Medicine Men of Civilisation” を書いた。この記事でディケンズの原住民に対する態度は人種差別主義から離れることはないが、しかし文明人との共通点を強調するなど、扱う対象の範囲が広がっている。この十年の歳月はディケンズにより広い知識と判断力を与えたと考えられる。その変貌をめぐって、本稿では “The Noble Savage” と “Medicine Men of Civilisation” という二つの雑誌記事を時代背景の変化と共に比較し、同時にそれぞれの時代に書かれたディケンズの小説との関連を考察する。そのために最初に “The Noble Savage” と *Bleak House* 中の人種差別主義、次に “Medicine Men of Civilisation” と *Our Mutual Friend* 中の人種差別主義に焦点を向け、その内容を比較し、ディケンズのこの十年の変貌を明らかにしたいと考える。さらに変貌に関わる時代状況を探り、ディケンズへの影響を探っていききたい。そして人種差別主義は変わらなかったが、内へと視点が向かうようになったという結論を導きたい。

## 1. “The Noble Savage” と *Bleak House* の中の人種差別主義

“The Noble Savage”はチャールズ・ディケンズが編集する週刊誌、*Household Words* の1853年6月11日号の巻頭に掲載された。その記事ではディケンズは最初に高貴な野蛮人を全く信用していないと述べている。しかしその根拠は高貴な野蛮人が驚くほどに厄介な人物で、実にひどい迷信的な存在にすぎないからという、一方的な理由が述べられているだけである。記事の冒頭から18,19世紀のロマン派の原始至上主義に対するディケンズの怒りが感じられる。“The Noble Savage”でインディアンやアフリカのブッシュマンを嫌悪しながら、ズールー族とカフィル族については少しばかりの賞賛と大きな嫌悪感を示すディケンズは、一方では文明人も高貴な野蛮人も自己中心癖など共通点を持つことを指摘し、単なる一方的な批判で終わってはいない。ただし文明人と高貴な野蛮人との比較はこの記事の最後の一段落のみであり、全体的に見えてくるのはディケンズの人種差別主義である。

ピーター・アクロイド(Peter Ackroyd)は1850年代のイギリスについて、社会的、政治的安定の時代で、国家の富の時代であったが、個々の歴史は変化の時代で、科学の進歩は都市の衛生や実地医学の進歩を必ずしも意味せず、産業技術の発展は工場改革に結びつかず、いくつかの点で、不安の十年間だったとまとめている(893)。さらに1850年代のイギリスの風潮は、プリティ・ジョウシ(Priti Joshi)によれば、ロバート・ノックス(Robert Knox)の*The Races of Men*(1850)によってその一部が示されている。ノックスはイギリスの人種差別主義の真の創始者で、人種が固定された生物学的運命であると解釈していた(296)。しかし*Household Words*の1850年10月26日号の“‘Cape’ Sketches”はアルフレッド・ホエーリー・コール(Alfred Whaley Cole)が書いた記事で、南アフリカの hottentots 族、マレー人、フィンゴ族の美点と欠点を詳細に述べてあり、この記事を採用した編集長ディケンズの人種差別主義を是正するのに役立ったと考えられる。ディケンズばかりでなく、ヴィクトリア朝の人々の人種に対する考えは科学の発展と共に変化せざるを得なかっただろう。1863年にはジェームズ・ハント(James Hunt)がロンドン人類学協会を創立して、人種の決定論を主張し、アフリカ人はヨーロッパ人よりサルに近いと考えていた(294)。このような社会状況の中で、“The Noble Savage”を書いたディケンズは人種差別主義の存在を当然のことと考え、例外はあるとしても、高貴な野蛮人を否定することが多かった。

1853年6月11日号の雑誌記事“The Noble Savage”で否定的に述べられていた南アフリカのケープ植民地から来たズールー族とカフィル族などの高貴な野蛮人は、同じ年に書かれた小説*Bleak House*には、その事情が見事に映し出されている。たとえば、この小説の第四章は「望遠鏡的博愛」と題されていて、ディケンズの間接的な人種差別主義が見えてくる。彼は直接述べていないが、この小説に登場する博愛主義者の行動を風刺することにより、彼らの活動の対象であるアフリカ人には救済する価値がないとして、ディケンズは原住民に対して人種差別意識を示している。この章の中心はジェリビー夫人で、「社会のために一身をささげている、非常にしっかりした女性」(34)であると紹介されながらも、さま

さまざまな時期に、さまざまな種類の社会事業に献身し、それが長続きしなかったことが暗示されている。実際にジェリビー夫人が物語の中に登場する前から彼女を糾弾するディケンズの皮肉な態度が散見する。博愛主義者を銜いながらも、ジェリビー夫人はまた自民族中心主義者でもあり、自分が属している民族の文化を絶対的な基準として諸文化の優劣や良し悪しを判断している。松岡光治は「他者と直面した時に深い不安感によって駆り立てられた侵略的な島国根性は人種差別主義と共に、ジェンダーの境界の強化を必要とするだろう」(50-51)と述べ、ディケンズによるジェリビー夫人の諷刺的描写の中に人種差別主義とジェンダーの境界の強化が融合していると指摘している(51)。

ジェリビー夫人のアフリカ開発計画とは、150 から 200 の家族をニジェル河の左岸を拠点としてコーヒーの栽培とポリオブーラ・ガーの原住民の教育に当たらせるというものだった。ディケンズはアフリカの原住民やアメリカのインディアンを直接貶めることはないが、ジェリビー夫人の周囲に原住民に類似した人物を描いて、人間の悪い標本のごとくに扱っている。これは“*The Noble Savage*”と同様の原住民に対する人種差別意識を示したものである。ロンドンには原住民に似た人々が存在するばかりでなく、原住民も驚くほど汚らしい貧民墓地がある。それはスラムの汚さやおぞましさを凝縮させた場所で、「トルコ人は野蛮な忌まわしいものとして拒絶し、カフィル人は戦慄を覚えるだろう」(151)と語られる。偉大な文明国であるはずのイギリスが、野蛮で忌まわしい場所となっている。人種差別主義を掲げながらも、小説を書く時は鏡像としてイギリスに転用し、その眼差しをイギリスに向け、鏡に映すとイギリスも野蛮人のように映る。すなわち野蛮人の他者化から、自分たちへの内在化という現象が起きているのだ。

ジェリビー夫人の場合と同じような、女性に対する厳しい眼差しに人種差別的要素が加味されることもある。*Bleak House* の中で明確に差別されている女性は、デドロック夫人のフランス人の侍女オルタンスである。彼女は最初に肌が茶褐色で、横目を使ってじっと盗み見をする癖があり、まだよく飼い慣らされていない牝オオカミのようであると紹介されている。そしてイギリス人の侍女ローザと比べられ侮辱される。それはデドロック夫人を迎えにくる場面で、夫人はローザを選び、オルタンスを置き去りにして馬車で去って行く。その後のオルタンスは靴を脱ぎ捨て、びしょびしょに濡れた草の中を歩くという奇妙な態度を取る。周囲の人々は彼女を頭がいいが高慢ちきで癩癩持ちだと話す。動物のイメージを与えられ、イギリス人によって屈辱的な仕打ちを受けるオルタンスには、獐猛な外人の顔を持ち、気が違っているかのようなだと、さらに差別的な言葉が投げかけられる。

弁護士のタルキングホーン氏とオルタンスとの場面もまた、彼女の異常性を強調するものである。タルキングホーン氏から与えられたお礼の二ポンドを彼女は床にたたきつける。彼女の口調は病的で強硬症のようだと表現され、タルキングホーン氏は彼女がまた来るなら警察に突き出すと言う。オルタンスはわがままで強情だという理由でデドロック夫人から解雇され、タルキングホーン氏に職を見つけてくれるように頼むのだが拒否される。追いつめられた彼女は彼をピストルで殺し、その殺人の罪をデドロック夫人に着せようとし

て失敗しバケット警部に逮捕される。その時にもオルタンスが外国人であることが強調され、外国の分別あるご婦人と呼ばれたり、あるいはフランス人が礼儀正しい国民だと思っていたと言われる。そして彼女は最後にトラのようにあえぎながら叫び、デドロック夫人の夫を哀れな赤ん坊のようだとののしって連れ去られる。殺人の罪を犯した彼女の末路はモデルとされるスイス人女性マリア・マニングと同じく絞首刑であろう。外国人、特にフランス人に対するイギリス人の偏見が露骨に示され、フランス人の犯罪を見破るイギリス人の推理の見事さが賞賛されるというプロットからは、後の *Our Mutual Friend* でのイギリスだけが偉大な国家であるとするポズナップの主張と同じ風潮を感じ取れる。野蛮人の他者化から、自分たちへの内在化という現象はまだオルタンスの場合では表面化しないで、あくまでも自民族を中心とする主張が行なわれている。一つの作品の中に停滞する感情と変化しようとする感情が共存し、この頃のディケンズの精神状態が示されている。

## 2. “Medicine Men of Civilisation” と *Our Mutual Friend* 中の人種差別主義

こうしたディケンズの人種差別主義とその裏返しの内へと向かう矛先は十年後、どのようになったか、その手がかりとしてディケンズの人種差別主義の変化を見るために “The Noble Savage” から十年後の 1863 年 9 月 26 日に書かれた “Medicine Men of Civilisation” を検討する。この記事でディケンズは同じくイギリスと原住民の両方を批判の対象としているが、アフリカの魔術師を非難する箇所には、1853 年の “The Noble Savage” からの変化はあまり感じられない。彼は魔術師の魔力は偽物であるのに高い料金を請求すると述べている。ただし彼の知識の広さは、南太平洋のトンガ列島の風習についての記述などからも知ることができる。トンガ列島では、すべての物が魂を持っていると考えられ、人が埋葬される時、その人の使っていた食器や武器と一緒に埋められると紹介している (281)。

この記事の最初でディケンズは文明人の中の原住民的要素を探り、原住民より優れていると自慢している文明人の社会について調べると述べている。そして北アメリカのインディアンの祈祷師の存在に注目し、「白い袖、黒いエプロン、グロテスクな帽子」(280) と服装の特徴を紹介する。次にアフリカの魔術師が非難される。魔術師は葬式の時に遺族から高い料金を請求し、その魔力が「無限の価値のないがらくた」(281) であるとディケンズは断言する。この記事は文明人との比較の試みであると言明しながらも、ディケンズの原住民に対する態度は、人種差別主義から離れることはない。

ディケンズの原住民についての批判は続けられ、インディアンの祈祷師とイギリスの大法官府主事とが比べられる。イギリスの大法官府主事の服装は黒いペティコートとおかしなカツラで、これが哀れなインディアンの祈祷師と共通点があると断言されている。イギリス人と原住民との比較は続き、原住民の顔に塗られた赤や青の縞模様や、耳に突き刺された魚の骨、鼻に付けられたカーテンリング、体中に塗られたいやな臭いのする油などが、イギリス王室の赤と青の制服と並べて同じようなものだと述べられている。

1853 年の “The Noble Savage” と比較すると、トンガ列島の風習やインディアンの祈祷

師を取り込むなど、ディケンズの叙述は扱う対象の範囲が広くなり、また冷静にその対象の特徴を浮き彫りにしている。ディケンズが原住民の風習を詳しく知っていることは明らかで、イギリス人と原住民の比較は、自国民を批判するための手段ともなっている。この時代のディケンズは彼の作品の公開朗読会を始めていて、各地を回り、1870年に亡くなるまで続けていたので、さまざまな経験を積み、これまでにないほどの知識を得ていたと思われるので、彼の編集する雑誌の記事にもそれが反映された。1853年の“The Noble Savage”を思わせる記述もあるが、50代となったディケンズは執筆に邁進し、*All the Year Round* という彼の編集する雑誌の内容の充実を目指していた。

アクロイドは1860年代のロンドンの変化について詳述している。川の北と南の大下水道の整備によって清潔になり、鉄道の侵略により切り刻まれ、1863年の地下鉄の開設で *Oliver Twist* の舞台が消滅し、30年代から40年代からロンドンを知っていたディケンズには古い都市が根こそぎにされたかのように思われたらう(939)。昔の密集したロンドンが消え去り、より大規模で組織化されたが、空虚で人間らしさの失われた都市で、スクルージやフェイギンなどのディケンズの初期の小説の登場人物を見ることは不可能だ(940)。そしてディケンズ自身もまた1860年代にはさまざまな点で変化していたことだろう。肉親や知人の死を経験し彼の体調も悪化し、鉄道事故に巻き込まれ、それでもロンドンから離れることなく現実の都市の姿を作品の中で描写しようとした。

1864年5月から1865年11月まで月刊分冊方式で出版された *Our Mutual Friend* ではユダヤ人ライア(Riah)が金貸しのイギリス人フレジビーに雇われている。フレジビーは二本足の生き物の中で、彼ほど卑劣なものはいないと最初に紹介され、一方ライアはユダヤ系で高齢者の威厳を備えていると述べられている。これは *Oliver Twist* とは全く逆の世界である。しかし雇い主のフレジビーは反ユダヤ主義の持ち主でユダヤ人を嘘つきだと非難する。そしてフレジビーはユダヤ人の悪名を利用しているので、周囲の人々はライアが金貸しだと信じている。作者ディケンズはユダヤ人について、ユダヤ民族の感謝の念は強く、深く、いつまでも消えないという賞賛の言葉をこの作品の文中で与えている。さらにユダヤ人を礼賛するイギリス人女性リジーも、こんなに親切な人たちは世界のどこにもいないと感謝する。

もう一人の反ユダヤ主義のイギリス人は弁護士のユージン・レイバーンで、ライアを強欲な高利貸しシャイロックと同じだと誤解している。ユージンは身分や階級を越えて下層階級の女性との結婚を選択するが、ユダヤ人に対する偏見は昔ながらのものである。彼は軽蔑していた身分の低い恋敵に襲われて、意識不明の重体となる。彼の命を救うのは下層階級の若い女性で、彼の生き方も主義もすべて否定される結果となる。

ライアはフレジビーの父親に借金があったために、その息子である金貸しフレジビーの隠れ蓑として働き、そのために周囲の人々から強欲な腹黒いユダヤ人だと誤解されている。しかし悪の正体を隠していたつもののフレジビーの嘘は見破られ、最後に金を貸した相手からステッキで激しく殴られ息も絶え絶えの状態にされる。反ユダヤ主義を利用していた

人物の末路は悲惨なものとなった。

ライアは当時の社会の現状について、このようなことを述べている。「一般の人々は『こいつは悪いギリシア人だが、良いギリシア人もいる。こいつは悪いトルコ人だが、良いトルコ人もいる』と言う。ユダヤ人についてはそうではない……彼らは最善の実例として、我々の中の最悪の実例を取り上げる……」。物語の最後にライアは古い昔からの自分の信仰と自分の民族の名誉を汚す仕事をやめようと決心する。ユダヤ人に対する偏見の残る社会の中でライアは新しい道を模索することになる。

ディケンズは *Our Mutual Friend* の中でユダヤ人への偏見を捨てようとするばかりでなく、彼自身の民族も批判している。それは中産階級の自己満足と島国根性丸出しのジョン・ポズナップ氏で、第一部第十一章の冒頭から、彼は彼自身の意見では、大変偉い人だったと紹介されている。彼の商売は他国との取引で成り立っていたのに、イギリス以外の国を認めず、他国の風俗習慣を非英国的と決めつけ否定する。そしてイギリス以外の国々は、なにかの間違いで出来たものだと思っていた。

ポズナップ氏は晩餐会に招待した客の中にフランス人がいると、耳の不自由な子供並みに扱ってからかう。その理由はヨーロッパ大陸の国々はこぞって若い人の道徳心を墮落させるべく危険極まる同盟を結んでいると彼が信じていたからだった。彼にとってヨーロッパ諸国およびアジア、アフリカ、アメリカは存在する意味を持たないのだ。晩餐会において最近路上で半ダースほどの人間が餓死したことを話題にする紳士がいると、ポズナップはイギリスほど立派な貧乏人対策を取っている国は世界中にどこにもないと反論する。

*Our Mutual Friend* の最後の章でもポズナップの態度に変化はない。彼は上流社会に属するヴェニアリング夫妻の晩餐会に招待されて出席する。彼の他には若手士官、醸造業者、株で大金を儲けた人物などがいる。彼は招待客の一人で事務弁護士のモーティマー・ライトウッドと大英帝国の諸問題を論じる。ポズナップにとってロシア、フランス、アメリカは大英帝国の敵であり、イギリスだけが偉大な国家である。ところがこの晩餐会の主催者のヴェニアリング夫妻には来週に破産する運命が待ち構えていた。上流社会の土台もけっして盤石ではなく、不安定な要素が潜んでいた。作者ディケンズもまたポズナップを肯定していない。短い言葉が作者の気持ちを示している。つまり‘Podsnap the Great’ と名前に *the Great* を付けて彼の愚かさを皮肉っているのだ。

ポズナップについてはディケンズの *Our Mutual Friend* 執筆当時の批評を見ると、1865年11月の *Eclectic and Congregational Review* の無署名の書評の中で、上流社会の人々を「我々の偉大な社会の罪」を示し、厳しい諷刺の対象となっていると指摘している。またディケンズはポズナップよりも悪漢のロジャー・ライダーフッドを好むであろうと述べている。1865年11月11日の *Saturday Review* でもポズナップは俗物であり、ディケンズはイギリスを最高の文明を持つ国家だと単純に考えることを嫌っているのだと指摘している。1866年4月の *Westminster Review* では第一部第十一章を取り上げディケンズのポズナップに対する憎しみに賛成すると断言している。そしてポズナップの発言が童謡の早口

言葉のように表され、ポズナップの芸術観が自分中心のものであることを示している。ディケンズに対して批判的な記事は見られないので、自民族中心主義のポズナップについて、人々の考えはディケンズと同様であったと言えるだろう。

1860年代にディケンズも含めて、自民族中心主義に嫌悪感を示す人々がいたことは事実だが、それは決して人種差別主義が完全に消滅したことを意味していたわけではなかった。たとえば *Our Mutual Friend* の最後の章で、ロビンソン・クルーソーを話題にすると、ファン・フェルナンデス群島の原住民は文明化の徴候として仲間同士で食い合いをしていたと答える事務弁護士がいる。また *Our Mutual Friend* の、ごく一般的な、平凡な市民のレジナルド・ウィルファー氏でさえ人種差別主義的な言葉を普段の会話で用いる。それはアフリカの王様についてで、黒人の王は下品で醜く着ている服もひどいものだと話す。

1860年代のイギリスにおいて人種差別主義は決してディケンズの物語の中心とはなっていない。単に物語の中の小さな部分であり、不可欠なものとは言えないだろう。それがなくても物語は成立する。そして激しく非難される自民族中心主義は一つの章をすべて用いて、ポズナップを代表として否定されている。この流れは *Our Mutual Friend* の次のディケンズ最後の、そして未完の小説である *The Mystery of Edwin Drood* においても第四章をすべて用いて町長のサブシー氏を描く時に、引き継がれている。内容も一人の人物を徹底的に解剖し、批判する点で類似している。サブシー氏は人種差別主義者の人物で、ろばのように愚鈍で、思い上がりの典型だと紹介され、彼が賞賛する歌の内容はイギリス以外のすべての国を粉砕し、すべての海を征服せよ、他の国の害虫どもを生み出したのは神様の間違いだというものだった。明らかにこの物語の中で、人種差別主義者サブシー氏は否定されている。十年の間に原住民への侮蔑が希薄になり、それと対照的にイギリス国内があまりに内部のほころびが見えすぎて、人種差別主義よりも自国への眼差しが変化していった。

### 3. ディケンズとヴィクトリア朝の思想と科学

ピーター・アクロイド(Peter Ackroyd)はディケンズの伝記 *Dickens* (1991) の中でヴィクトリア朝の科学や思想に対するディケンズの反応に関して述べている。トマス・マルサス(Thomas Malthus) は *An Essay on the Principle of Population* (1798)で、「貧乏人は彼がいる所に存在する権利はない。自然の女神の祝宴において、彼のための食べ物はない」と書いたが、ディケンズはこのような言葉を嫌悪し軽蔑した(464)。ディケンズの書斎にはチャールズ・ダーウィンの *On the Origin of Species by Means of Natural Selection* (1859) とチャールズ・ライエル(Charles Lyell)の *Principles of Geology* (1830-33) があり、アクロイドはディケンズの小説が彼の時代の科学的関心を反映していると指摘し、*Bleak House* の中に熱力学、電気学、電磁気学などが存在すると断言する(698)。小説だけでなく、雑誌を編集する際に多くの科学的知識や思想がディケンズの前に提示され、多くを学ぶことができたのだろう。ただしディケンズはすべてをそのまま受け入れるのではなく、批判する眼

を持っていたと思われる。

ディケンズのクリスマスのために書かれた物語について分析したサリー・レジャー(Sally Ledger) は、クリスマス・キャロル(*A Christmas Carol*) (1843) は功利主義思想への攻撃であり、またマルサスの人口論も批判されていると指摘している(181)。スクルージが貧しい人々のために施しをすることを拒絶する根拠は、乞食の死が過剰人口を減少させるのに積極的な機能を果たすということだったが(182)、この主張は作者ディケンズによって明確に否定されている。ディケンズによって書かれた *Oliver Twist* (1839) については、1834年の新救貧法への反応だと、ポール・ヤング(Paul Young) が述べている (248)。新救貧法の内容の一部としてすべての貧困者は夫婦でさえ、救貧院の中で分離されたという事実はマルサスの経済学と関連する施策だったという指摘もある(248)。ディケンズの批判する眼はヴィクトリア朝のさまざまな思想、政府による施策に向けられていたことが理解できる。

1859年のダーウィンによる *Origin of Species* 出版のすぐ後にディケンズは彼の編集する雑誌 *All the Year Round* に “Natural Selection” (1860) という題の記事を掲載した。この記事では、冒頭からダーウィンへの疑念が示される。著者は「16世紀に生きる代わりに、現代に生きているのは、チャールズ・ダーウィン氏にとって良いことである」(293) と述べ、その理由は16世紀ならば監禁され、破滅させられていたであろうからであり、ヴィクトリア朝は寛容な時代であると指摘している(293)。ダーウィンは「綿密な観察、知的能力、そして大胆な思索で有名な家族の出身であり、友人が多く、豊かな財産に恵まれ、身体が弱く、地球上を船でめぐり、野蛮人と文明人の風習を見た」(294) と紹介され、彼の理論に対しては一般の人々があまりになじみのないものなので、偽りであろうと、真実であろうと、断固として拒絶されると述べている (294)。神による創造理論では説明のできないことがあると認めながらも、結論としてダーウィンの理論が最初に提議された人々にとって苦しみと衝撃を与えようとも、その理論が真実ならば一般的な評価を妨げられないだろうと、否定的であり、ペネロペの織物のように、無情にもほどかれ、より有能な人物がしっかりと、耐久性のある織物を作り上げることになるだろうとまとめている(299)。丹念にダーウィンの研究内容を追体験しながらも、最初から最後まで、この記事は批判することをやめない。匿名でありながらも、編集長ディケンズの意向を反映したものだと言えるだろう。

1848年に *Principles of Political Economy* を書いたジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill) は「人間の正常な状態は成功を求める戦いであると考え人々の人生の理想を肯定できない。人を押し分け踏みつけるような社会生活に反対する」(496)と、彼の立場を表明したとポール・ヤング(Paul Young) が述べている(249)。これはディケンズの考えとほぼ同意見であると考えられる。ところがグレース・ムーア(Grace Moore)によると、この後にミルとディケンズは、1865年10月11日のジャマイカのモラント湾での反乱の時に、反対の立場を取るようになった。この時、数百人のジャマイカ人が警察本署を攻撃したので、1857年から59年に起きたインド大反乱の再来ではないかと恐れたエア総督が戒厳令を布告し、軍隊が出動して、その結果、五百人近くのジャマイカ人が命を奪われた。当時

イギリスでは、エア総督について二つの意見があり、対立した。一方はエア総督を殺人の罪で審理することを主張するミル、トーマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas Henry Huxley)、ダーウィン、そしてライエルで、もう一方はエア総督を英雄として勲章を授けるべきだと主張するトマス・カーライル(Thomas Carlyle)、チャールズ・キングズリー(Charles Kingsley)、そしてジョン・ラスキン(John Ruskin)だった(290)。ディケンズはカーライル一派と見られていたのだが、実際にはこの問題について発言することが少なく、エア総督のために請願書に署名しただけで、ムーアは1860年代にディケンズの植民地に対する関心が衰えてきていると指摘している(290)。

ディケンズとヴィクトリア朝の思想と科学との関係は、常に密接で、彼は主に雑誌記事の中でそれらを批判的な視点から問題にしていた。しかしエア総督をめぐる論争においては、ムーアによると、それについての雑誌記事も *All the Year Round* の1866年3月3日に掲載された“Black is not Quite White”一つだけで(290)、以前の激しさは消えて、ディケンズの変化を示していた。この記事は最初にジャマイカの反乱の後に哀れな虐げられた同胞(彼らの唯一の罪は彼らの肌の色である)に対するあわれみと同情を感じる人々と、彼らを絶滅させようとした民族に対する復讐と憤りを感じる人々がいることを報告している(173)。著者は冷静に前者と後者を批判し、特に黒人の真の性質の知識が全く欠如していると述べている(173)。ジャマイカの黒人については、奴隷状態から解放されても労働を人生の大きな悪の一つ見るのに慣れていると述べ、五年間、熱帯地方に住んだ人の体験談を紹介している(174-6)。うそだらけで雇い主を騙した有色人種のウィリアム、正直で勤勉な召使いのジョンとその妻、若く知的でこの階級にしては教育を受けているが怠惰な料理人のジョゼフ、有色人種と一緒に食事することを嫌うイギリス人の召使い、預けられた子供を道路に二時間半放置し友人たちと遊んでいた乳母など、有色人種に関して批判的な事柄が続いている。この記事はエア総督を擁護する意図のようだが、彼が五百人近くのジャマイカ人を処刑したという事実は消すことができない。

## おわりに

*Our Mutual Friend*において第一部第十一章をすべて用いて描かれた自民族中心主義者のジョン・ポズナップは、イギリス以外の他の国々を認めず、さらに国内の貧民の悲惨な状況をも軽視する人物として、否定されている。この物語では自民族中心主義者、そして人種差別主義者は批判の対象となっている。また1860年代当時の *Our Mutual Friend* の書評においても、ポズナップは俗物と考えられ、人々の考えがディケンズと同じであったことを示している。ディケンズは自民族中心主義、人種差別主義から脱却しようとしていたのだらう。

にもかかわらず、人種差別主義の名残りはまだ存在していて、それは文明人と原住民の類似点を雑誌記事の中で指摘しながらも、*Our Mutual Friend* では依然として原住民に対する固定観念が継続して残っていることによって示されている。この傾向は1868年1月、

3月、4月、5月にアメリカの雑誌である *Our Young Folks* に連載された *Holiday Romance* という作品でも、消えることなく現われている。この話は8歳のウィリアムが語る形式で、まだ幼い子供たちが主人公だが、俗語の ‘cocoanut’ (白人に迎合する黒人) が用いられ、主人公の悪口を言う人物として描かれている。人種差別主義の根深い性質を示す例の一つと言えらる。

ジェイムズ・マッセル(James Mussell) はヴィクトリア朝の科学が、降霊術、自然神学、催眠術、骨相学を捨てて、今日の科学へと向かうと考えられたが、そのようにはならず超自然の現象の研究を擁護したと指摘した(326)。このように科学と似非科学の混在したヴィクトリア朝においてディケンズの生涯は時代を映し出す鏡のようであった。ブラウンによると、19世紀の終わりまでに自由主義経済への熱狂は、帝国主義と優生学という新たに勃興しつつあった考えと容易に結びついた(107)。優生学という名前をつけたフランシス・ゴールトン(Francis Galton) は、1880年代にすでに確立されていた、国家主義的、人種差別的な社会的考えの上に優生学の原理を打ち立てたのだが、それは進化理論と結びつくことによって大きな社会的勢力となり得たのだ(107)。科学を専門としないディケンズにも優生学的な考えは影響を与えようとしていたのだろう。それはディケンズの、黒人ばかりでなく、エスキモー人、ユダヤ人、そしてインド人に対する姿勢に現われていた。1853年から1863年までのディケンズの変化については、人種差別主義は未だにその名残が見られるとはいえ、内に向かう眼がより明確になったと考えられる。

#### 引用参考文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1991.
- Brown, Janet. *Darwin's Origin of Species: A Biography*. London: Atlantic Books, 2006.
- Cole, Alfred Whaley. “‘Cape’ Sketches.” *Household Words*. Vol.2. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1989.
- Collins, Philip, ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1971.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. The Oxford Illustrated Dickens Edition. Oxford: Oxford UP, 1987.
- . *Our Mutual Friend*. The Oxford Illustrated Dickens Edition. Oxford: Oxford UP, 1970.
- . *The Mystery of Edwin Drood*. The Oxford Illustrated Dickens Edition. Oxford: Oxford UP, 1972.
- . “Medicine Men of Civilisation.” *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces*. The Oxford Illustrated Dickens Edition. Oxford: Oxford UP, 1968.
- . “The Noble Savage.” *The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol.3. London: Dent, 1998.
- Joshi, Priti. “Race.” *Charles Dickens in Context*. Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux.

- Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Ledger, Sally. "Christmas." *Charles Dickens in Context*. Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Matsuoka, Mitsuharu. "Dickens, Racism, and Chauvinistic Madness." *The Japan Branch Bulletin of the Dickens Fellowship*. Ed. Eiichi Hara and Yuji Miyamaru. Kyoto: Kyoto UP, 2011.
- Moore, Grace. "Empires and colonies." *Charles Dickens in Context*. Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Mussell, James. "Science." *Charles Dickens in Context*. Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Young, Paul. "Political Economy." *Charles Dickens in Context*. Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Anon. "Black is not *Quite* White." *All the Year Round*. Vol. XV. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1991.
- Anon. "Natural Selection." *All the Year Round*. Vol.3. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1991.
- 山本まゆみ. 「ディケンズと人種差別主義——”The Noble Savage” 前後の状況証拠——」  
『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第40号(2017年11月) pp. 3-14.